

掌編賞次点作品

雪の舞い込む橋

立川れんじ

雪がひらひらと舞う雑踏、男は地面を見つめている。

そこには、一匹の鼠が雪に埋もれ、身を震わせ、息絶えようとしている。

男はそれを見て、自分は生きたいと思った。死にたくないのだ。生きていたい。

街の人ごみを進み、川沿いの道をたどる。堤防の向こうの川には雪が降っては溶けていく。黒々とした川面に男は抗いようのない運命を感じる。流れに逆らうことはできないと感じる。けれど、生きたいのだ。

交差点が青になったから渡ろうとした時だった。

突然、耳をつんざく轟音が響き、次に巨大な鉄塊で力任せに殴られる衝撃を体全体に受けた。そして、男の体は、裂けた腹部から内臓を吐きだしながら、宙を踊った。

辺りに悲鳴が響く。男は頭から地面に墜落すると、意外にも頭に痛みはなく、ただ柔らかく形を崩し、脳髓をまき散らした。

誰もがこの男は死んだと思った。事実、男は死んだ。

けれど、男は立ちあがった。腹からは内臓をだらしなくこぼし、頭はひしゃげて灰褐色の脳髓を垂らしている。

意識はあった。だから周囲の様子を窺った。目撃者や騒ぎに乗じた人ばかりができており、こちらを見つめている気がした。しかし、立ち上がった男を見ていない。男の足元を見ている。

男は不審に思い、足元を見やる。はたして、そこには無残な屍となった男が横たわっていた。

ああ、死んだのか、と思った。けれど、意識はある。男には、やらなければならないことがあった。だから、男はその場を立ち去り、歩き出した。

雪は勢いを増し、辺りの気温は低くなった。川沿いを歩く人々が寒そうに肩をすぼめる。

男には同棲している女がいた。ワケありの女だ。家出をしたと聞いていたが、それは嘘だと分かった。一緒に住み始めてしばらくしてから、女が男の住むアパートからしばしば出かけることがあったのだ。あとをつけてみると、女の『家』を見つけた。だから、家出は嘘だと知ったのだ。だが、それは男の自尊心を傷つけない、女を見下すことのできる『家』であり、男の手元から女が逃亡する恐れのないような『家』であったので、男は心の底で自分が嘲り笑っていることに気づいた。

だから、女のそういう浅ましい行動はどうでもよかった。世間から相手にされず、関心を持たれず、皆より低い場所で生きている自分を頼ってくる、自分しか頼ることのできないであろうこの孤独な女を愛おしく感じたのだ。女が心変わりしない限り、この女は俺に支配されるしかないのだという歪んだ愛情を感じた。その思いは男の心の隅々にまで、腐敗したかのように充満した。

つい最近、男は働くことをやめた。それ以前に男は多くの職場を経験していた。いずれも低

い人間達の集まる場所で、そういう所で男は用無しだと罵られる。使い物にならないと責められる。死んでしまえと殴られる。男は打ちひしがれていた。そんな時、街で女を拾った。件の女である。行き場がないのか、不安げに目を泳がせるその女に男は声をかけ、アパートに連れ込み、女の体を貪った。月に照らされるアパートの一室。裸の女は語った。自分を虐待する義父から逃げているのだと。そんなことは俺には関係ない。男はそう感じたが、とりあえず同情する風に頷いておいた。それから、また乳に手を伸ばし、女の股間をまさぐった。

男と女の生活は墮落の延長線上にあり、また墮落を加速させるものでもあった。男は事あるごとに女の性器に顔を押しつけ舐めつけた。女にもその逆を要求し、自らのものを女に押し付け啜えさせた。女は嫌がるものの抵抗はしない。このアパートで暮らすしか道のない女なのだとその時、男は分かった。男の体に甘い毒が広がった。生まれて初めて、女を所有したのだ。

女には気まぐれで優しく声をかけた。女はあいまいな微笑を返した。そして、時には仲よく腰を合わせ、時には無理やり股を開かせた。女に意思はないのだと、男は感じた。思いのままに犯せると思った。

しかし、ある時、女が言った。私、一人で生きていこうかな。

男の心に衝撃が走り、亀裂を走らせ、そこから圧倒的敗北感が滲み出した。何故だとは、問えなかった。男の矜持がそれを許さなかった。しかし、男が問わずとも女は続けて喋るのだ。

女はまず言う。私が働くことを許さない。顔を曇らせる女の顔を初めて見た。男は唸った。

女を働かせないのは当然である。女は外に出てしまえば他の巣を見つける。男の汚いアパートより良い住処を見つけたら。そんなことは許さない。この女は自分のものなのだという思いが男の生きる糧であったのだ。

女が次に言う。あなたはいつまでたつても仕事をしない。女はつらそうに涙を流す。男は驚愕した。男にとつて、もはや働くことは恐怖であった。このアパートの一室が男の全てだった。女と交わることが男の全てだった。ここでこの女と共に朽ちていくのだ。死せる日まで性器を結合させるのだ。男は唸る。そもそも、世間は男など侮蔑の目でしか見ないのだ。いや、関心すら持たないのだ。男の体が自然、震えた。この女も、こいつまでもが——俺を苦しめようとするのか。男は怒りを感じた。だから、体の赴くまま、何度も罵倒し、何度も殴りつけた。そして身動きを取らなくなった女を、やはり犯した。女は声を殺して泣いていた。

女はその日、姿を消した。けれど、男は女の行き場を知っていた。女は『家』に帰ったのだ。川沿いの先にある橋の下の段ボールハウスだ。女はそこで野宿生活をしている。

雪が吹きすさぶ。男は自分の体が徐々に軽くなっているのを感じていた。死した後のこの体が虫に食われていくかのように、ぽつぽつと無くなっていくのだ。その破片は天に昇っていく。馬鹿馬鹿しい、俺は天に召されるのか、男は毒づいた。俺は何もしていない。いいことも、悪いことも——なのに、善人扱いか。

段ボールハウスの前に立ち、扉から女の様子を窺った。薄汚れた服を着た女が寝そべり、こ

ちらをじつと見ている。だが、男を認識している素振りはない。男の体はますます軽くなっていく。もはや、足も腕も腹も、消えてしまった。

それでも、男は生きたいと願った。この女と——生きたいと願った。

けれど、それは叶わないと男はもはや分かっていた。胸が天の虫に食われ、消えていく。

女に会えて、幸福だった。車に轢かれた時に、せめて女をもう一度見たい。初めて自分の自由にできた女をこの目に焼き付けたいと思ったのだ。その願いを叶えてくれたのだから、天もそう悪い奴じゃない。男の望みを叶えたのだ。

その時、虚空を眺める女の、その口元にすうつと笑みが形作られた。まるで男に微笑みかけるかのように。唇が動いた。それは男に優しく語りかけるかのように。その声が男に聞こえてきた。「あなたと真つ当に暮らしたかった」

その言葉に男は雷鳴に打たれたかのような衝撃を受けた。男が確認しようと瞬きをして女を見やると、先ほどの無表情の女がそこにいるばかりだった。ずっと無表情であったのかもしれない。男の見間違いであったのかもしれない。

しかし、声は幻ではないと男は思った。何故だか、確信があつた。女の揺らめく炎のように強い意志を感じ取り、女が必死に生きているのだと、それまで一度も意識したことのない現実がまざまざと見せつけられた。その時になってようやく、男はようやく女を一個の人間であるとするに至つたのだ。

男は苦しんだ。女が現実を見つめ共に生きていこうと考えているなどとほんの僅かでも考えなかつた。ただの性欲のはけ口であるとか考えなかつた。男はそんな生前の不甲斐ない自分に気づいた。まるで生前の自分が他人であるかのようにひどく客観的に見るようになってしまった。そのことが男には不気味にも感じられた。

女の言葉を反芻する。働いてほしいという女の想いに怖気づいた自分を思い出す。社会を恐れた自分を思い出す。女を犯すことで逃げ続けた自分を思い出す。

人の評価によってしか己を確立することができなかった自分が、今更ながら悲しかった。人の悪意により腐り、女を物のように扱つた自分が情けなかつた。女のために生きれば良かったと、男は顔を歪めた。この自分を一人の男として見てくれる女を、もっと大事にすれば良かった。そうすれば、今という時間がわずかであれ、違っていただろう。しかし、もう遅いのだ。天はそれを知らしめるためにこそ、男をここへ来させたのだ。

男は戻らない女との時間を想い、女に見せた事のないような悲しげな微笑みを浮かべた。すると、一瞬後、その顔はすうつと消えてなくなっていた。光り輝く粉がいくつも天へと昇っていく。橋の下には、ただ雪が舞い込むばかりとなった。

雪の舞い込む橋

作者 立川れんじ

第四回 「俺的小説賞」 応募作品 43 掌編賞次点作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。
無断転載は禁止しています。